Operation Raleigh News

Operation Raleigh
DENSO

No.15

昭和60年(1985)12月5日(木)
毎月1回発行

●発行所　オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1−7−10 築地オーミビル502号
電話　東京(03)544−7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

大西洋横断そして中南米へ　国際交流と冒険の旅

充実の1985年を振り返って

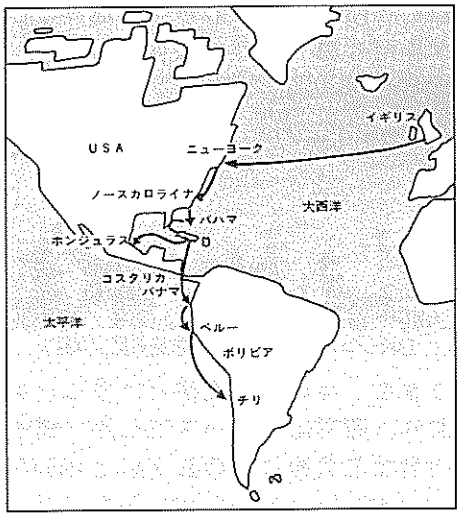
1984年10月、ORの第1陣として帆船ゼブ号が英国サザンプトンを出航しました。さらに11月には旗艦SWR号が英国ハル港を出航し、大西洋を渡りました。ORはいよいよ4年間にわたる「世界一周の科学と冒険と奉仕」の旅に出発したのです。この1年、英国からペルーまでORの足跡をたどってみましょう。

帆船ゼブと旗艦SWRで

●第1陣(1984/9〜1985/1)
2本マストの小さな帆船ゼブ号で南大西洋を横断。サザンプトン—リスボン—アンティグアーバハマというコースで日本からも松井君、桃井君が参加。強烈な船酔いを体験。

●第2陣(1984/11〜1985/1)
2つの科学試験室を備えた1,890トンの旗艦SWR（サー・ウォルター・ローリー）号で英国ハル港から大西洋を渡り、ニューヨーク、ノースカロライナを経てバハマへ。船のサビ落しやペンキ塗りも体験。日本からは戸上君、橋本さん、伊藤さんの3人が参加。

●第3陣(1984/12〜1985/3)
バハマ諸島での海洋調査を中心としたプロジェクト。海洋汚染調査、熱帯魚観察、洞窟生物調査などに加えて帆船操作訓練、スキューバダイビング、建設作業などに従事。日本からは堀内君、大見君、小俣君、戸崎君の4人が参加。



本格的ジャングル探険へ

●第4陣(1985/2〜5)
中米コスタリカでのプロジェクト。熱帯雨林での動植物調査、キャンプ地づくり、ジャングルパトロール、遺跡発掘調査などに従事。日本からは前橋さん、山内君が参加。

●第5陣(1985/4〜6)
中米ホンジュラスおよびベリゼでのプロジェクト。川をさかのぼるトレッキングや途中の遺跡調査、動植物観察、測量などの作業に従事。日本からは勝間君、今田君、田中君、谷川君の4人が参加。

●第6陣(1985/4〜7)
中米パナマのジャングルおよび海岸地帯でのプロジェクト。スキューバダイビング、医療奉仕活動、カヌーによる川下り、鉱物調査などに従事した。日本からは平野さん、川村君岸田さん、筒井君の4人が参加。

南米の大自然を訪ねて

●第7陣(1985/7〜9)
南米ボリビアでのプロジェクト。野生動植物のリストづくり、鳥、カメなどの生態調査、サバイバルツアーなどを体験。日本からは菊地君、新保さんが参加。

●第8陣(1985/7〜9)
南米ペルーでのプロジェクト。野生動植物保護区でのワニ・サル・鳥類などのリストづくり、薬草の調査、野生動植物保護区の施設整備作業、インカ遺跡へのトレッキング、川下りなどを体験。日本からは原田さん細田さん、石本君、大塚君の4人が参加。

●第9陣(1985/12〜1986/3)
南米チリでのプロジェクト。日本からは片岡さん、加藤さん、鈴木君、高柳君、吉田君の5人が参加予定。

これ以降ORは1985年次の参加青年たちにバトンタッチされ、南太平洋のトンガ、フィージー、ソロモン、パプアニューギニア、さらにオーストラリア、ニュージーランドでの新しいプロジェクトが展開されます。

紙上座談会 ORJC1985年を語る

ＯＲニュース編集部ではＯＲＪＣ実行委員、事務局員を対象に今年１年間のＯＲＪＣ活動全般について、各自にレポートしていただきました。年末の多忙な時期にもかかわらず、ご協力くださった方々には心から感謝いたします。それらのレポートをもとに日本国内におけるＯＲ活動にポイントを絞って「紙上座談会・ＯＲＪＣ1985年を語る」をまとめました。

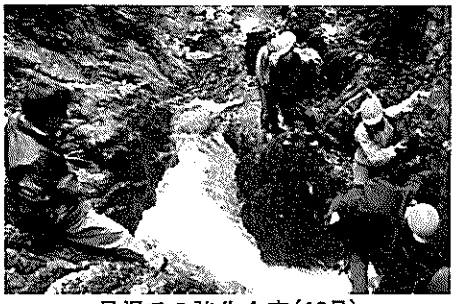
「丹沢合宿」「無事帰国」が好印象

編集部　今年は実質２年目に当り、ＯＲニュースも15号を数えることになりますが、ＯＲＪＣの活動でとくに印象に残ったできごとは？

Ａさん　第１次から３次までの選考と丹沢合宿ですね。とくに第３次選考で「みんなと共同生活するなかで誰が合格しても自分たちの代表として喜んで送り出せる気持ちになった。たとえ落ちても満足です――」と語っていた青年のさわやかな顔が目に残っています。

Ｂさん　那須での自由時間にテントのなかで遊牧論などについてえんえんと議論したこと。たわいなくも、真剣なおしゃべりでした。

Ｃさん　やはり、丹沢合宿の寒さや岩登りが印象的です。また日本テレビ系特別番組「地球こそわが舞台」の収録、ＯＲシンポジウム「文化を見る目」なども……。



丹沢での強化合宿（10月）

Ｄさん　1984年次参加メンバーたちの就職先がいずれも一流といわれるところに決まった、という葉書をもらったことですね。私たちの選んだ冒険青年たちが、今日的な社会評価の面でも認められたということはうれしいニュースでした。

Ｅさん　中南米は地震や火山噴火などハードラックなできごとが多かったのですが、参加青年たちがみんな無事に帰国してくれたことですね。ケガや病気も小さなものだったようで、胸をなでおろしています。

編集部　確かにたいした事故がなかったことが最大の喜びですね。それでは、今年のＯＲＪＣの運営についてご意見を……。

Ｂさん　この１年間の審査経過を見て、私自身の当初の選考基準が変りました。当初は野外活動にセンスのある青年をと考えていましたが、最終的にはＯＲ自体が優れたトレーニングカリキュラムであると気づき、むしろ白紙のままの青年を送りこむべきだと思うようになりました。

ORシンポジウム「文化を見る目」（7月）

Ｄさん　今年は２度目ということもあり、運営はスムーズでした。審査合宿などを通じ、ＯＲＪＣと1984年次参加青年とのつながりがもてたことはすばらしいことでした。

シンポにもっと聴衆を

Ａさん　選考手順を手直ししたことがよい結果を生んだと思います。ただ、ＯＲシンポジウムはすばらしい先生方のお話で、内容が充実していただけに、もっと大勢の聴衆が集められたのではないかと思います。

Ｅさん　送り出しについては参加青年たちが大きな成長を見せて帰ってきてくれたし、大きなアクシデントもなく大成功だったと思います。選考に関しては、体力やグループ活動への適応力を重視したが、きっと好結果をもたらすと信じています。

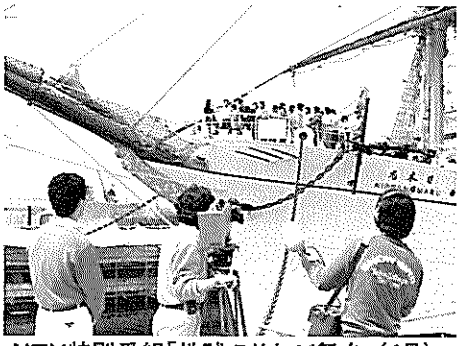
Ｃさん　７～８月の日程がかなり過密になるので、試験科目の配分、合格人員の調整など、何らかの改善が必要だと思います。また広報活動がまだまだ不十分です。とくに現地で活躍している参加青年たちのホットニュースが日本のマスコミで紹介されるとよいのですが……。シンポジウムの聴講者を満員にすることも課題ですね。

日本フェイズの準備へ

編集部　なるほど、まだまだ課題は沢山ありますね。それでは来年への抱負をお聞かせください。

Ｃさん　1986年次の選考は最終の30人を選ぶわけですから、これまでの体験のすべてを生かして、粒のそろったいい代表を選びたいですね。また海外で活躍中の代表、新代表、シンポジウムをうまく統合し、国内広報を活発化しなければなりません。

Ｂさん　1987年のジャパン・フェイズの前年ですから、それを視野に入れた工夫をしたいですね。



NTV特別番組「地球こそわが舞台」（4月）

Ｅさん　ジャパン・フェイズに向けて、これまで英国本部からの受身的姿勢を見直し、ＯＲＪＣの主体的な活動の場づくり、意義の明確化をしていきたいと考えます。たとえば、冒険＋科学＋奉仕というＯＲの活動方針が日本国内でどのように展開できるか、いろいろ考えてみたいと思います。

Ａさん　ＯＲという言葉も青少年団体関係者などで市民権を得はじめたようです。ジャパン・フェイズではさまざまな場面で応援団が必要ですので、そのときのための準備に入りたいと思います。

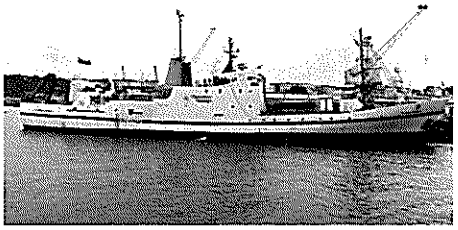
Ｄさん　来年はプレ・ジャパン・フェイズの年。立体的、相乗的なプレ・キャンペーン展開を図っていきたいですね。がんばりましょう。

ゼブ号12月にシドニーへ

ゼブ号はハワイからフィージーに向かう途中での10月下旬、サモアから北東へ 900海里、赤道直下の太平洋上で熱帯無風帯に入り、非常にゆっくりした航海を続けています。貿易風をつかまえるのに苦労し、フィージーに到着するのは11月22日頃。しかし、12月９日にはオーストラリアのシドニーに入港し、新しい乗組員を乗せる予定です。

SWR号はチリ南部に

ＳＷＲ号は11月中旬現在、チリ南部の港プエルトモントに停泊しています。港の設備はすばらしく、周囲の山々の眺めも壮大ですが、天候は雨が多く、大変寒いと報告されています。夏の南半球とはいえ、南緯40度のプエルトモントは、日本でいえば北緯40度の津軽海峡と同じ、やはり夏でも寒いようです。



イギリス本部NEWS

チリでの活動開始

日本からの参加は12月下旬からになりますが、チリのフェイズがもう始まっており、10月下旬ＯＲ英国本部評議会副議長のスネル氏がチリでのベースキャンプを訪問しました。ここでのおもなプロジェクトは以下のとおりです。

- ●当地の森林委員会とともに珍しい鹿の一種の調査
- ●さまざまな奉仕活動
- ●ボートによる川下り
- ●礁湖や氷河の観察
- ●道路の建設のための調査・測量

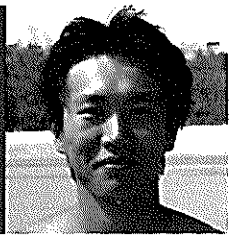
ペンキ塗りかえ 英国本部化粧直し

英国本部は週末や夕方などの時間をつかって、建物のペンキを塗りかえましたので、とてもスマートに見えます。国際連絡事務所には大きな世界地図が壁に貼られました。これはたぶん、16世紀に印刷されたもので、その地図にはサー・ウォルター・ローリー卿の航路を示す世界一周の点線が記入されています。

森林保護の映画・講演

10月31日にロンドンのレスタースクエアー劇場で「エメラルド・フォレスト」（ジョン・ブールマン監督作品）という映画が英国で初公開され、ＯＲ関係者約50名が出席しました。ＯＲ活動の目的のひとつである熱帯雨林保護や資源調査と関連がある映画で、同時に森林生態学に関する講演会が行なわれました。なお、「エメラルド・フォレスト」は日本では今年９月に公開されています。

OR参加青年リレー・レポート《第7回》



郷に入りては郷に従え

1984年次第7陣　菊地 孝範

ボリビア・フェイズでの３ヵ月を終え、帰国して振り返ってみると、ああすればよかった、こうすればよかった、と反省点ばかりです。フェイズによって行動内容、システムなどはかなり違いがありますから、比較的一般にいえると思われる点をあげてみます。

まず、言葉の障害です。これには泣かされました。英会話が不得手な私は喋れないということがこんなに苦痛であるとは思いませんでした。まるで図体のでかい赤ん坊です。たとえば、あるプロジェクトのスケジュールを立てるといった場合、たとえ意見をもっていてもそれを表明する手段を持合わせていなければどうしようもありません。85年次の皆さんは英語が達者のようですから、この点は心配ないかもしれませんが、国や地方によって発音にかなり違いがありますから、とくに聞きとりは万全を期すようにしたほうがよかろうと思います。また現地の人々との接触も多いので、余力があれば現地語をかじっておくことをお勧めします。

次に、自分のフェイズに対する知識を深めておく必要性も痛感しました。国に関する情報も知っておくと便利だったり、実際の印象との差が面白かったりするものですが、それよりも自分がＯＲで何をやるのか、

また、何をやりたいのかについての洞察をしておくと何かと役に立ちます。医療、動植物研究のプロジェクトでは知識、興味がないのに参加しても、ただの荷物運び役に甘んじてしまうことになります。貪欲な好奇心をいまから育てておきましょう。何らかのエキスパートになれば、非常に貴重な存在として尊敬を受けます。料理、釣り、登山、救急法など身につけるべきだったテクニックはいま思うといくらでもあります。

最後に、自分のペースを早くつかむよう努力することです。ＯＲは肩書のない社会です。自分の存在は、自分の言動によってしか表わせません。それにはできる限りのことに挑戦して、さまざまな局面で自分はこういう人間だ、と主張することが肝要です。そして自分なりの個性を出していけば、心から生活を楽しむことができるでしょう。

いろいろ書きましたが、要は「郷に入りては、郷に従え」だと思います。あ、そうそう書き忘れていましたが、欧米人はやたら逞しいので体を鍛えておくこともお忘れなく！

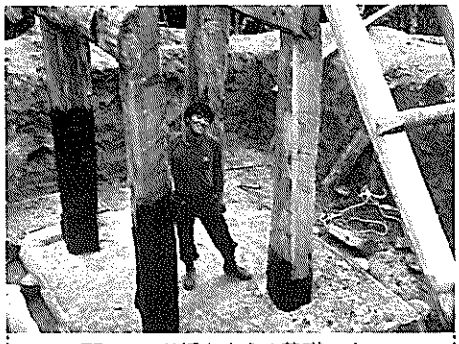
日本代表派遣青年のページ

印象的だったつり橋づくり

1984年次第７陣としてペルー・フェイズに参加した石本一鶴君は約３週間の英国滞在の後11月３日元気に帰国しました。石本君の帰国後アンケートをご紹介しましょう。

――ＯＲへの当初のもくろみは？
好奇心です。

――帰国後のＯＲへの評価は？
総合的評価としてはかなり高い。



75mのつり橋を支える基礎に立つ

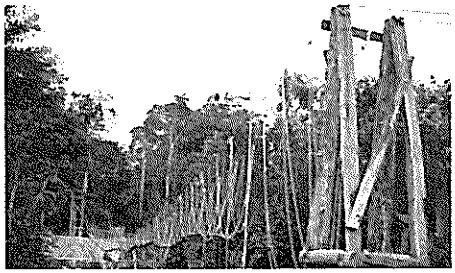
――苦労したことは？
言葉です。

――楽しかったことは？
ＯＲの後のイギリス旅行で10人の英国ベンチャラーたちの生活をかいま見ることができたこと。

――異国人とのふれあいで感じたことは？
英国人はイギリス文明の中でより個性的に見えました。ジャングルでは同じ文明圏人として、そう違和感はありませんでした。

――一番印象的だったことは？
つり橋の完成を見ずに他のプロジェクトに移動したことです。あと３日あれば足りたと思いました。

――有意義だったプロジェクトは？
完成まで見届けられなかったが75mものつり橋づくりに参加したこと。



完成まぢかのつり橋　雨期になると増水するためつり橋が役に立つ

――事前にマスターしておけばよかったことは？
スペイン語とＯＲに関する自覚を深めておけばよかったとおもいます。

――日本人と外国人との違いは？
日本人は日本の風土で育ち、日本人らしい情感と生活様式をもっているが、外国人も同様でその違いは外国人によって異なり、一括しては論じられません。

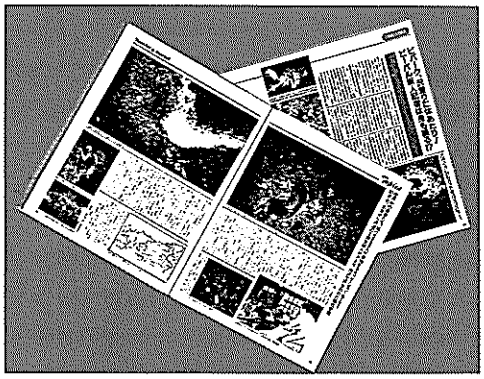
――協賛企業・日本電装に関する外国人の反応は？
どんな会社なのか質問されました。日本からの参加者について一手に引き受けている excellent company だと答えると、誰もが納得していました。

ペルーフェイズの大塚君 イギリスからの手紙

10月９日まではペルー、10月10日以降英国国内を旅行中です。ロンドンに１週間滞在し、ＯＲ本部でジャパンフェイズの資料を見せていただきました。また旅行中、ＯＲのベンチャラーの家でスライドを見せてもらったり、観光地に案内してもらったりしています。イギリス国内旅行の後、ヨーロッパ大陸にも渡りたいと思っています。年末までには帰国したいと思います。

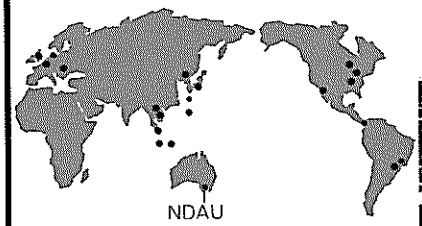
「丹沢」山溪・BE-PALに

「山と渓谷」「ＢＥ－ＰＡＬ」が1月号で10月18日から20日まで実施した1985年次派遣青年のＯＲ丹沢強化合宿について体験ルポを掲載しています。両誌の記者、カメラマンが同行取材したときの模様をレポートしたもので、それぞれ２ページにわたって詳しく紹介されています。



デンソーワールドワイド・オペレーションNo.4――――――――――――オーストラリア

76年ぶりに、ワクワク。



コアラ、エリマキトカゲなどで、一躍人気を浴びたオーストラリア。北半球にある日本とは、まるっきり気候が正反対のこの大陸でもデンソーマンは大活躍。よりよい製品づくりでカーライフをもっと楽しく…をモットーに広い大地を飛び回っています。そんな彼らの最近の話題は、もっぱら〝ハレー彗星〟。76年ぶりの対面に、少年のように心を弾ませている毎日なのです。

所在地:Cnr. Kororoit Creek Road & Grieve Parade. Altona Victoria 3018. Australia Tel(03)369-1177
売上高:94,700千ドル(132億5,800万円)/従業員数:434人
〈1985年4月現在〉

DENSO
日本電装株式会社 〒448 刈谷市昭和町1-1 ☎(0566)22-3311(代)